

新羅における『無量寿経論』テキストの受容

辻本 俊郎

- 一、問題の所在
- 二、元暁の見た『無量寿経論』テキスト
- 三、憬興の見た『無量寿経論』テキスト
- 四、義寂の見た『無量寿経論』テキスト
- 五、法位の見た『無量寿経論』テキスト
- 六、結論

キーワード：『無量寿経論』、元暁、憬興、
義寂、法位

一、問題の所在

新羅の諸師、すなわち、元暁（西暦617年～686年）、憬興（西暦681年頃）、義寂（西暦7世紀後半～8世紀初め）、法位（西暦7世紀頃）の章疏に世親（Vasubandhu、西暦400～480年）著・菩提流支（Bodhiruci、永平初年（西暦508年）より北魏の都・洛陽において、その後、東魏の都・鄴において天平2年（西暦535年）まで訳出に従事）漢訳『無量寿経論』¹が引用されている。

この『無量寿経論』は、菩提流支の浄土教としての弟子である曇鸞（西暦476～542年？）²によって註が施された。すなわち『無量寿経論註』である。『無量寿経論註』は『無量寿経論』の全文を引用し、註を施したことはよく知られている。しかしながら、『無量寿経論註』より『無量寿経論』本文を抽出し、『無量寿経論』本文との比較を試みたところ、字数はもちろんのこと、字句の異同が甚だしく、場合によっては文意も大きく異なることが明らかとなった³。つまり、『無量寿経論』テキストの伝播状況として最初期の段階から『無量寿経論』系と『無量寿経論註』系の二系統に大別されるということである⁴。

そこで、『無量寿経論』と『無量寿経論註』所引本の『無量寿経論』との異同についていくつか眺めて見よう。ここでは便宜上、「大正大藏経」所収の『無量寿経論』と対比させ、頁数は「大正大藏経」26巻のものである。

(表①)

大正大藏経	『無量寿経論註』
梵声語深遠（231上）	梵声悟深遠
故我願往生（231上）	是故願往彼

¹ 『無量寿経論』の題名については辻本〔2010〕、大竹〔2011〕を見よ。

² 曇鸞は菩提流支によって仙經を焼き捨てて浄土教を信仰するに至ったのであるから、彼は菩提流支の弟子であると考えてよい。

³ 辻本〔1999〕を見よ。

⁴ そもそも『無量寿経論』が漢訳されたとされる年代も2説ある。すなわち、西暦529年説と西暦531年説とである。筆者は、菩提流支によって2度漢訳されたと考えている。これに関しては辻本〔2011②〕を見よ。

讃 仏 諸功德（231中）	讃 諸 仏功德
功德 莊嚴（231中）	莊嚴 功德
利益 他迴向行（233上）	迴向 利益他行
一者清淨功德成就（231中～231下）	一者 莊嚴 清淨功德成就（以下、二者～十七者まで同様である）
觀安樂世界見阿弥陀 仏 願生彼国 土 故（231中）	示現 觀安樂世界見阿弥陀 如来 願生彼国故
若善男子善女人修五念門成就 者 畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀 仏 （231中）	若善男子善女人修五念門 行 成就畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀 仏
成就大悲心故（231中）	得 成就大悲心故
觀察彼 仏 国土 功德 莊嚴者（231中）	觀察彼 仏 国土 莊嚴 功德成就者
略説彼阿弥陀 仏 国土 莊嚴 十七種功德（232上）	略説彼阿弥陀 仏 国土 十七種 功德成就
二者 身 莊嚴三者 口 莊嚴四者 心 莊嚴（232上）	二者 莊嚴 身業功德成就三者 莊嚴 口業功德成就四者 莊嚴 心業功德成就
与淨心菩薩 無異 淨心菩薩与上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故（232中）	与淨心菩薩与上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故
云何 觀 菩薩 功德 莊嚴成就（232中）	云何 觀察 菩薩 莊嚴 功德成就
三者彼於一切世界無余照諸仏会大衆無余广大無量供養恭敬讚 歎 諸仏如来（232中）	三者彼於一切世界無余照諸仏会大衆無余广大無量供養恭敬讚 嘆 諸仏如来 功德
又向説 仏 国土 功德 莊嚴成就（232中）	又向説 觀察 莊嚴 仏 土功德成就
菩薩如是修 五門 行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故（232中）	菩薩如是修 五念門 行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故

以上のことから、『無量寿經論』に比べて『無量寿經論註』所引文の方が、字数が増えている傾向にあり、場合によっては、文意が異なる文も見られることが確認されよう。

また、ここでは煩雑になるので省略する（詳細については辻本〔1999〕を見よ。）が、改行箇所も大いに異なるのである。例えば、宋・東禪寺版・開元寺版・思溪版では改行は10箇所であるが、宋・磧砂版・杭州版では、19箇所もあり、高麗再雕版では、13箇所である。さらに注目すべきは、曇鸞は『無量寿經論』を釈するにあたって、『無量寿經論』の長行を「解義分」と称して、その内容を10節に分けてそれぞれに題名を付した。すなわち、願偈大意、起觀生信、觀察体相、淨入願心、善巧摂化、障菩提

門、順菩提門、名義摂対、願事成就、利行満足である。改行というのは、当然のことながら無意味に行われるというのではなく、内容を理解し、次第順序を明らかにするために行われるのである。しかしながら、大藏經所収の『無量寿經論』改行箇所と曇鸞の「解義分」と一致するところはない。つまり、曇鸞の内容理解が全く反映されていないことが分かるのである。改行箇所一つ採ってみても『無量寿經論』と『無量寿經論註』とは一線を画しているのである。

次に宋版と高麗再雕版「大藏經」所収の『無量寿經論』について主な字句の異同を示す。頁数は便宜的に大正大藏經第26巻のものである。

(表②)

宋版	高麗再雕版
梵声 悟 深遠	梵声 語 深遠（231上）
我願皆往生	我皆願往生（231中）

無量寿修多羅章句以偈頌惣説竟	無量寿修多羅章句我以偈惣説竟（231中）
一者礼拝	一者礼拝門（以下、二者讃歎～五者迴向も同様）（231中）
云何礼拝身業礼拝阿弥陀仏如来応正遍知	云何礼拝身業礼拝阿弥陀如来応正遍知（231中）
於彼觀察一切世間苦惱衆生同願生彼安樂国土願心所有功德善根以巧方便迴向攝取衆生不捨一切世間故	不捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首成就大悲心故（231中）
不可思議力故	成就不可思議力故（231中）
偈言仏慧明浄日除世痴冥闇放	偈言仏慧明浄日除世痴闇冥故（231下）
彼無量寿仏国土莊嚴第一義諦妙境界相	彼無量寿仏土莊嚴第一義諦妙境界（232上）
菩薩功德莊嚴成就	菩薩功德成就（232中）
一者無染清浄心以不為自身求諸樂故	一者無染清浄心不以為自身求諸樂故（232下）
以讃歎阿弥陀仏随順名義称如来名依如来光明知相修行故得入大会衆数	以讃歎阿弥陀仏随順名義称如来名依如来光明想修行故得入大会衆数（233上）
以大慈悲觀察一切苦惱衆生示応化身迴入生死園煩惱林中遊戲神通至教化地以本願力迴向故	以大慈悲觀察一切苦惱衆生亦応化身迴入生死園煩惱林中遊戲神通至教化地以本願力迴向故（233上）
無量寿修多羅優波提舍偈略解義竟	（相応文なし）

このように『無量寿経論』テキストは、『無量寿経論』としての形態と『無量寿経論註』に引用された『無量寿経論』としての形態、そして、前者は宋版に入蔵されたものと、高麗再雕版に入蔵されたそれとも大いに系統を異にしているのである⁵。

本小論では、新羅の諸師、すなわち、元暁、憬興、義寂、法位が引用した『無量寿経論』本文と『無量寿経論』としての形態と『無量寿経論註』に引用された『無量寿経論』としての形態を比較対照させることによって、彼らが見た『無量寿経論』テキストを明らかにし、新羅に流伝した『無量寿経論』テキストがどの系統であったのかという問題解決の一指針としたい。

二、元暁の見た『無量寿経論』テキスト

元暁が浄土思想を取り扱った著書として『両卷無量寿経宗要』、『仏説阿弥陀経疏』が現存している。また、元暁に仮託されたものとして『遊心安楽道』がある⁶。

まず『両卷無量寿経宗要』であるが、元暁は其中で『無量寿経論』を2か所引用している。それは、「往生論中五門行」（『往生論』の中に五門行が〔説かれる〕）（大正37巻128中）である。これに対して『無量寿経論』では、「菩薩如是修五門行」（菩薩はこのように五門行を修める）（大正26巻233上）云々とあり、ここでは取意としての引用であり、文意に相違はな

⁵ 『無量寿経論』テキスト系統を大別すると『無量寿経論』そのものと『無量寿経論註』所引の『無量寿経論』、すなわち、前者をA、B、D系統とし、後者をC系統とする、二系統である。それをさらに細別すると次のようになる。

A①宋・東禅寺版、宋・開元寺版、房山雷音洞石刻本

A②宋・思溪版

A③宋・磧砂版、元・杭州版、明・洪武南蔵

A④明・永楽北蔵、明・嘉興蔵、清・龍蔵

B①高麗・再雕版、房山雲居寺石刻本、中華大蔵経、大正蔵経

B②大日本校訂大蔵経、中華民国・頻伽蔵

C 親鸞加點本『論註』所引『論』、京都常楽寺所蔵存覚書写本、浄土宗全書、浄土真宗聖典七祖篇（原典版）、真宗聖教全書

D（古写本）系 正倉院聖語蔵本、稲田山長福寺「七寺一切経」、「金剛寺一切経」

これに関しての詳細については、辻本〔1999〕〔2006〕〔2014〕を見よ。

⁶ 『遊心安楽道』に関して、愛宕〔2006〕は華嚴僧智憬説を採る。また、辻本〔2007〕では、『遊心安楽道』に引用された『無量寿経論』を手掛かりとして考察を試みたが、元暁著とは到底考えられず、日本において著されたとの結論に至った。

いと言える。また、元暁は、「女人及根欠 二乗種不生」（〔極楽浄土に〕女性や心身障害者、二乗の種は生まれない）（大正37巻126中）と引用しているが、『無量寿経論』も「女人及根欠 二乗種不生」（大正26巻231上）であり、字句などの異同はなく、全く同じである。したがって、『両卷無量寿経宗要』では、残念ながら元暁がどの『無量寿経論』テキストを参照したのかを探る手がかりはない。

次に『仏説阿弥陀経疏』に引用される『無量寿経論』を見ていくことにする。それは以下の通りである。

・論説二乗種不生（大正37巻348中）。（『〔無量寿経〕論』は、〔極楽浄土には〕二乗の種は生まれないと説く。）

・無諸難功德成就。如論頌言。永離身心悩受樂常無間故⁷。（中略）莊嚴地功德成就。如論頌言。雜華異光色宝欄遍圍繞故。（中略）莊嚴水功德成就。如論頌言。諸池帶七宝淥水含八德。下積黄金沙上耀青蓮色故。（中略）種種事功德成就。如論頌言。備諸珍宝性具足妙莊嚴故。（中略）莊嚴妙色成就功德。如論頌言。無垢光焰熾明淨耀世間故。一妓樂功德。常住天樂虛。二宝地功德。黄金為地故。三雨華功德。六時雨華故。如論頌言。金地作天樂雨華散其間。歡樂無疲極昼夜未嘗眠故。（中略）如論頌言。供養十方仏報得通作翼。愛樂仏法味。禪三昧為食故。（中略）如論頌言。種種雜色鳥各各出雅音。聞者念三宝忘想入一心故。（中略）如論頌言。大乘善根男⁸等無譏嫌名女人及根欠二乗種不生故。（中略）如論頌言。莊嚴虚空功德成就

者。偈言無量宝交絡羅網虚空中。種種鈴鈴響宣吐妙法音故。（中略）莊嚴性功德成就者。偈言正道大慈悲出生善根故。二者莊嚴性功德。（中略）如論頌言。莊嚴清淨功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。（中略）論云。莊嚴眷属功德成就者。偈言如来淨華衆正覺華生故。（中略）論言。何者莊嚴大衆功德成就偈言人天不動衆清淨智海生故。（中略）言。何者莊嚴上首功德成就。偈言如須弥山王勝妙無過者故。（中略）言。大乘善根男等無譏嫌名（大正37巻349上～350上）⁹。

（諸難がないという功德の成就とは、『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「永久に身心の悩みを離れ、樂を受けること常に間がない」と云う。（中略）莊嚴たる地という功德の成就とは、『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「〔極楽浄土の〕様々な華は異光の色を放ち、宝欄はあまねく取り囲んでいる」と云う。（中略）莊嚴たる水という功德の成就とは、『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「諸の池は七つの宝を帯び、八種の特質をもった水がその中に満たされている。その下には金の砂が敷き詰められており、その上に青色の蓮の華が輝いている」と云う。（中略）種種事という功德の成就とは、『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「諸の珍しい宝の性質を備え、素晴らしい莊嚴を具えている」と云う。（中略）莊嚴たる妙色という功德の成就とは、『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「けがれのない光焰はさかんにして、明淨にして世間を耀かす」と云う。一には、妓樂という功德である。〔極楽浄土には〕常にすばらしい音楽が空

⁷ 『大乘起信論』に見られる「故」は、理由句ではなく、サンスクリット語原典で引用の後に付けられる iti に相応する場合もあるとする（宇井・高崎〔1994〕pp.302-303）。また、安達〔1998〕は、『無量寿経論』に見られる「故」に関しても同様な見解を有する。

⁸ 高麗再雕版の『無量寿経論』末尾に「大乘善根界 天台智者即曰界字乃男字之錯即宜改作而疏家 皆作界字故今存之」とあり、天台智者大師、すなわち、智顗は

界の字は男の字の誤りだとする。しかしながら、智顗の書物の中でこのような記述は見出せない。ただ、知礼（西暦960～1028年）『観無量寿仏経疏妙宗鈔』の中に「大乘善根男」と『無量寿経論』を引用している箇所（大正37巻228中）がある。

⁹ 太字の文は元暁が論曰としながらも、実は『無量寿経論』には見えない文を引用しているのである。これについては辻本〔2009〕〔2015〕を見よ。

〔中〕に〔響く〕。二には、宝地という功德である。黄金が大地となっているが故に。三には、雨華という功德である。〔昼夜〕六時に〔曼荼羅〕華が雨のように降るが故に。『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「〔極楽浄土の〕地は、金から出来ており、すばらしい音楽が〔聞こえ〕、その間に〔曼荼羅〕華が雨のように降って、〔極楽浄土の人々は〕歓楽し、昼夜にわたって眠らなくても疲れを感じない」と云う。『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「十方仏を供養するに、翼を有する鳥のように〔十方に〕行きわたり〔十方の仏たちに〕報いることを得、仏法の味と禅三昧とを愛樂することを食となす」と云う。(中略)『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「いろいろな美しい色をした鳥が、それぞれ美しい音色で鳴いている。〔それを〕聞くものは、三宝を念じ、一心に集中してそれ(三宝)を想うのである。」と云う。(中略)『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「大乘の善根の男は、等しく、譏嫌の名前は存在しない。女性と心身障害者と二乗の種は生まれない」と云う。(中略) 莊嚴たる虚空という功德の成就とは、『〔無量寿経〕論』の〔偈〕頌に「無量の宝が交じり合っており、羅網、虚空にあまねし。種の鈴は響きを発し、すばらしい法の音を宣吐する」と云う。(中略) 性という功德の成就とは、「正道と大慈悲という、出世の善根より生じる」と云う。二つには莊嚴たる性の功德である。(中略) 莊嚴たる清浄という功德の成就とは、『〔無量寿経論〕』の〔偈〕頌に「観ずる。かの世界の姿は、三界道を超えている」と云う。(中略) 莊嚴たる眷属という功德の成就とは、「如来の浄華衆は、正覚によって華に化生する」と云う。(中略) 何が莊嚴たる大衆という功德の成就かと言えば、「天と人となる、不動の衆、清浄智

によって海のように生じる」と云う。(中略) 何が莊嚴たる上首という功德の成就かと言えば「須弥山王の、勝妙にして、過ぎるものないがごとき者は」と云う。(中略)『〔無量寿経論〕』に〕言う。大乘の善根の男は、等しく、譏嫌の名前は存在しない)

この中で、太字で記した文は、元暁が無量寿経論より引用している体裁と採っているが、実際には、菩提流支訳『無量寿経論』には見られない¹⁰。これらの文は、元暁が、『無量寿経論』の偈として創作したものであると考えられる。したがって、この太字の文はここでは考慮に入れない。

ここで問題となるのは「莊嚴地功德成就」「莊嚴水功德成就」「莊嚴妙色功德成就」「莊嚴虚空功德成就」「莊嚴性功德成就」「莊嚴清浄功德成就」「莊嚴眷属功德成就」「莊嚴大衆功德成就」「莊嚴上首功德成就」である。これらはすべて「**莊嚴**○○功德成就」という定型句になっているが、この特色は、すでに表①で確認したように『無量寿経論註』系のそれである。「古写本」系や「大蔵経」系はすべて「○○功德成就」となっており、「莊嚴」という二文字は見えない。したがって、元暁が、『無量寿経論註』系を座右において『阿弥陀経疏』を執筆した証左であると考えられるのである。

三、憬興の見た『無量寿経論』テキスト

憬興『三弥勒経疏』の中には次の一か所のみ『無量寿経論』からの引用が見られる。すなわち、「一礼拝門(中略)二讃歎門(中略)三作願門(中略)四觀察門(中略)五迴向門」(大正38巻317上)(一には礼拝門、(中略)二には讃歎門、(中略)三には作願門、(中略)四には

¹⁰ これについては不思議なことにその文は平仄の配慮は見られないものの、音数律が保たれ、また、節奏点も守られ、さらに韻を踏んでいることから、元暁自ら

『無量寿経論』の偈として創作した可能性が高いと考えられる。詳細については、辻本〔2016〕を見よ。

観察門、(中略)五には迴向門)である。

これを支持するテキストは、古写本系、『無量寿経論註』系である。それらは「一者礼拝門二者讃歎門三者作願門四者観察門五者迴向門」となっている。これに対して大蔵経系は「一者礼拝二者讃歎三者作願四者観察五者迴向」となっており、「門」の字がないのである。

次に『無量寿経連義述文賛』に引用された『無量寿経論』を見ていく。すなわち、次の16文である。

- ① 論云究竟如虚空广大無辺際故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「究竟すること虚空のように広大にして辺際がない」と)(大正37巻154上)。
- ② 論云正覚阿弥陀法王善住持故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「正覚した阿弥法王は善く住持する」と)(大正37巻155上)。
- ③ 論云備諸珍宝性具足妙莊嚴故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「諸の珍しい宝の性質を備え、すばらしい莊嚴を具足する」と)(大正37巻155上)。
- ④ 論云浄光明満足如鏡日月輪故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「浄らかな光明、満足する。鏡や日輪、月輪のように」と)(大正37巻155上)。
- ⑤ 論云無垢光炎熾明浄曜世間故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「無垢の幸光炎は熾んにして、明浄にして世間を曜かす」と)(大正37巻155上)。
- ⑥ 論云觀彼世界相勝過三界道故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「観る。かの世界の相は、三界道を勝過する」と)(大正三七巻一五五上)。
- ⑦ 論云衆生所願樂一切能満足故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「衆生の願樂するところ、すべてよく満足

する」と)(大正37巻155中)。

- ⑧ 論云相好光一尋色像超群生故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「相好の光一尋、色像は群生を超える」と)(大正37巻155下)。
- ⑨ 論云觀仏本願力遇無空過者能令速満足功德大宝海故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「仏を見ると、本願力に遇って空しく過ぎる者なく、よく速やかに功德の大宝海を満足させる」と)(大正37巻155下)。
- ⑩ 頌云天人不動衆清浄智海生故(『無量寿経論』の偈頌は〔次のように〕云う。「天と人から成る不動の衆、清浄智によって海のように生まれる」と)(大正37巻156上)。
- ⑪ 往生論。二乗種不生(『往生論』に「〔極楽浄土には〕二乗の種は生まれない」とある)(大正37巻156上)。
- ⑫ 論云梵声悟深遠微妙聞十方故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「〔仏の〕浄らかな声が〔衆生を〕悟らせることは深遠であり、微妙にして十方に聞こえる」と)(大正37巻156中)。
- ⑬ 論云無量宝交絡羅網遍虚空種種鈴鈴響宣吐妙法音故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「無量の宝、交絡し、羅網、虚空に遍く〔広がっている〕。種々の鈴は響きを發し、妙なる法の音を宣吐する」と)(大正37巻156下)。
- ⑭ 論云宮殿諸樓閣觀十方無礙雜樹異光色宝欄遍圍繞故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「宮殿には諸の樓閣があり、あらゆる方向を見渡すのに妨げるものはない。それぞれの色をした光を放つ様々な樹や宝の欄干が〔宮殿の〕まわりをすべてにわたって取り囲んでいる」と)(大正37巻156下)。

⑮ 論云宝華千万種弥覆池流泉微風動華葉交錯光乱転故（『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「千万種の宝の華が、池と流れ（川）と泉とを覆っている。微風が華や葉を動かすと交錯する光は乱転する」と）（大正37巻157上）。

⑯ 論云如来微妙声梵響聞十方故（『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「如来の微妙な声は、梵の響きとして十方に聞こえる」と）（大正37巻158上）。

この中で⑬「梵声悟深遠」が問題となる。これを支持しているのは、雷音洞石刻本、「古写本」系、『無量寿経論註』系である。高麗再雕版などでは「梵声語深遠」となっているのであ

る。おそらく旁や音が同じであるため、誤写が生じたことは想像に難くないが、「悟」あるいは「語」という観点においてテキストの系統が異なるのである。すなわち、前者は、宋・元・明など「大蔵経」や「古写本」、曇鸞『無量寿経論註』の系統であり、後者は高麗再雕版の系統なのである。また、同じように「梵声悟深遠」として引用している諸師は竜興（西暦655～712年?）である¹¹。さらに善導（西暦613～682年）『往生礼讃偈』¹²、智昇（西暦730年）『集諸経礼懺儀』¹³では「声」と「音」との相違はあるけれども「語」ではなく「悟」、つまり「梵音悟深遠」となっているのである。これを表にすると次のようになる。

（表③）

梵声悟深遠	雷音洞石刻本、正倉院聖語藏写本、金剛寺一切経、七寺一切経、宋版大蔵経、元版大蔵経、明版大蔵経、清版大蔵経、流布本、『無量寿経論註』義寂『無量寿経述義記』、憬興『無量寿経連義述文賛』
梵声語深遠	高麗再雕版大蔵経、雲居寺石刻本など
梵音悟深遠	善導『往生礼讃偈』、智昇『集諸経礼懺儀』

以上のことから、憬興が実際に見た『無量寿経論』テキストは、『無量寿経論註』系であるとの結論に達するのである。

四、義寂の見た『無量寿経論』テキスト

義寂は『無量寿経述義記』を著したことは確認されているが、残念ながら現存していないのである。しかしながら、幸いなことにそのような状況にあって、恵谷が『無量寿経述義記』を引用している良源『九品往生義』、源信『往生要集』、源隆国『安養集』、良忠『選択集決疑

鈔』・『浄土宗要集』、了慧『無量寿経鈔』・『往生論註拾遺鈔』、聖聡『大経直談要註記』、良栄『選択決疑鈔見聞』から収集し、その一部が明らかとなっている（恵谷〔1976〕¹⁴）。

義寂『無量寿経述義記』における『無量寿経論』は次の通りである。

- ① 論云。勝過三界道（『無量寿経論』に〔次のように〕云う。「三界道を勝過する」）（恵谷〔1976〕420頁6行目）。
- ② 如論偈云。究竟如虚空广大無辺際故（『無量寿経論』に〔次の〕ように云う。「究竟すること、虚空のように広

¹¹ 恵谷〔1976〕372頁。

¹² 大正47巻443下。

¹³ 大正47巻470下。

¹⁴ ただ恵谷の復元本は現存しない論書を他師の諸論書に

引用された文を蒐集して有益であるが、残念ながらどういふわけか誤植（校正ミスだと思われる）が少なからず見られるので、これを参照する際には必ず恵谷が底本として用いた論書などを確認する必要がある。

- 大にして辺際がない」と)(恵谷〔1976〕423頁16行目)。
- ③ 一者観察彼仏土莊嚴功德。二者観察阿弥陀仏莊嚴功德。三者観察彼諸菩薩莊嚴功德。云何観察彼仏国土莊嚴功德者成就不可思議力故。如彼摩尼如意宝珠故。相似相对法故(一にはかの仏土の莊嚴功德を観察すること、二には阿弥陀仏の莊嚴功德を観察すること、三には、かの諸菩薩の莊嚴功德を観察することである。かの仏国土の莊嚴功德の完成は、不可思議力であるからである。かの摩尼如意宝の性のように相似相对の法であるからである)(恵谷〔1976〕424頁11行目～13行目)。
- ④ 一莊嚴清浄功德成就。二莊嚴量功德成就。三莊嚴性功德成就。四莊嚴形相功德成就。五莊嚴種々事功德成就。六莊嚴妙色功德成就、乃至、十七莊嚴一切所求満足功德成就(恵谷〔1976〕425頁14行目～15行目)。
- ⑤ 如論偈云。究竟如虚空广大無辺際故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「究竟すること、虚空のように广大にして辺際がない」と)(恵谷〔1976〕426頁5行目)。
- ⑥ 如偈云。浄光明満足如鏡日月輪故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「浄らかな光明、満足する。鏡や日輪、月輪のように」と)(恵谷〔1976〕426頁14行目)。
- ⑦ 如論偈云。備諸珍宝性具足妙莊嚴故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「諸の珍しい宝の性質を備え、
- 妙なる莊嚴を具足する」と)(恵谷〔1976〕426頁17行目～427頁1行目)¹⁵。
- ⑧ 如論偈云。觀彼世界相勝過三界道故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「觀る。かの世界の相は、三界道を勝過する」と)(恵谷〔1976〕427頁5行目)。
- ⑨ 如偈云。正道大慈悲出世善根生故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「正道と大慈悲という出世の善根より生じる」と)(恵谷〔1976〕427頁10行目)。
- ⑩ 如偈云。仏恵明浄日除世痴闇冥¹⁶故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「〔阿弥陀〕仏は、慧の明浄であることによって、太陽のように世の痴という闇冥を除く」と)(恵谷〔1976〕428頁4行目)。
- ⑪ 論説言。相好光一尋(『無量寿経論』に〔次の〕ように云う。「相好の光は一尋である」と)(恵谷〔1976〕428頁4行目)。
- ⑫ 如偈云。梵声悟深遠(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「梵の声は〔衆生を〕悟らせること深遠である」と)(恵谷〔1976〕429頁9行目)。
- ⑬ 如論偈云。宝華千万種弥覆池流泉微風動華葉交錯光乱転(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「宝華の千万種は、動かすと池と流れ(川)と泉とを弥覆する。微風が華と葉を動かすと、交錯する光が乱転する」)(恵谷〔1976〕431頁11行目～12行目)。
- ⑭ 如論偈云。永離身心悩受樂常無間

¹⁵ 恵谷の復元本には「備諸珍宝性具足妙莊嚴故」となっているが、西村・梯〔1993〕(247頁1行目)により、「備諸珍宝性具足妙莊嚴故」と訂正。

¹⁶ 「闇冥」。意味の似た字を重ねている。テキストによ

れば、「冥闇」となっているものもあるが文意は変わらない。「長阿含経」の『大本経』や「雜阿含経」第45の1198経には「闇冥」と見える(前者は大正1巻7中、後者は大正2巻326上)。

(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「永く身と心との悩みを離れ、楽を受けること常に間がない」)(恵谷〔1976〕431頁17行目)。

- ⑮ 如論偈云。愛樂仏法味禪三昧為食故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「仏法の味と禪三昧とを愛樂することを食となす」と)(恵谷〔1976〕432頁2行目)。
- ⑯ 如偈云。大乘善根界等無譏嫌名女人及根欠二乗種不生故。浄土果報離二種譏嫌過応知。一名体。二者名離体。名体有三種。一者二乘人。二者女人。三者諸根不具人。無此三過失。故名離体譏嫌名。亦三種。非但無体乃至不聞二乘女人諸根不具。三種名故。名離名譏嫌等者平等一相故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「大乘善根の界は、等しく、譏り、嫌われる名もなく、女性と心身障害者、二乗の種は生まれない」と。「浄土という果報は、二種の譏り、嫌われるという過を離れているとよく知りなさい。一には体の、二には名の、体に三種ある。一には二乗の人、二には女性、三には心身障害者である。この三つの過がないから体の譏嫌を離れているという。名もまた三種である。但、三つの体がないだけでなく、乃至、二乗と女性と心身障害者との三種の名前を聞かないから、名の譏嫌を離れているという。等しくというのは平等一相であるからである」)(恵谷〔1976〕432頁5行目～

8行目)。

- ⑰ 又往生論云。即見彼仏未証浄心菩薩畢竟得証平等法身故(また、『往生論』に次のように云う。「すなわち、かの〔阿弥陀〕仏を見ると、未だ浄心しない菩薩は、畢竟して平等法身を得るのである」と)(恵谷〔1976〕436頁2行目)。
- ⑱ 論云。何者菩薩巧方便廻向礼拝等所集一切功德善根。不求自身住持之樂欲。拔一切衆生苦故。作願撰取一切衆生共同生彼安樂仏国。是名菩薩巧方便廻向成就。如是善知廻向成就。遠離三種菩提門相違法¹⁷。何等三種。一依智慧門不求樂遠離我心貪著自身故。二依慈悲門拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。三依方便門憐愍一切衆生。遠離供養恭敬自身心苦故。菩薩遠離如是三菩提門遠離法¹⁸、得三種隨順菩提門法。漸且故。何等三種。一無染清浄心。以不為自身求諸樂故。二安清浄心。以拔一切衆生苦故。三樂清浄心。以令一切衆生得大菩提故¹⁹。以撰取衆生彼国故(『無量寿経論』は〔次のように〕云う。「何が菩薩の巧な方便廻向であるのか。礼拝などの五種の修行の集まるころの、一切功德善根によって、自ら住持の樂を求めず、すべての衆生の苦を抜こうと欲するから、すべての衆生を救済し、ともにかの安樂仏国(極樂浄土)に生まれようと作願する。これを菩薩の巧な方便廻向の完成と名付ける。菩薩はこのように廻向の完成を

¹⁷ 恵谷の復元本には「遠離三種菩提門違法」とあるが、西村・梯〔1993〕により「遠離三種菩提門相違法」と訂正。

¹⁸ 恵谷の復元本には「薩遠離如是三菩提門遠離法」とあるが、西村・梯〔1993〕により「菩薩遠離如是三菩提

門遠離法」と訂正。

¹⁹ 恵谷の復元本には「以合一切衆生得大菩提故」とあるが、西村・梯〔1993〕により「以令一切衆生得大菩提故」と訂正。

善く知って、三種の菩提への門に相違する法を遠離する。何が三種であるのか。一には智慧という門によっては、自らの楽を求めないことによって我心にしえ、自身に貪著するものを遠離する〔からである〕。二に慈悲という門によっては、すべての衆生の苦を抜くことによって衆生を安ずることのない心を遠離する〔からである〕。三に方便という門によっては、すべての衆生を憐愍する心によって自らを供養恭敬する心を遠離する〔からである〕。これを三種の菩提への門に相違する法を遠離すると名づける〔からである〕。菩薩はこのような三種の菩提への門に相違する法を遠離すると、三種の菩提への門に随順する法の満足を得る〔からである〕。何が三種なのか。一には染のない清浄心である。自らのためには諸楽を求めないからである。二には安んずる清浄心である。すべての衆生の苦を抜くからである。三には楽の清浄心である。すべての衆生をして大菩

提を得させようということから衆生を救済し、かの国土に生じるからである」(恵谷〔1976〕443頁8行目～13行目)。

- ①⑨ 如偈云。無量大宝王微妙浄華台故(『無量寿経論』の偈に〔次の〕ように云う。「〔極楽浄土には〕無量の大宝王の微妙な浄華台がある」と)(恵谷〔1976〕452頁12行目)。

ここで問題となるのは、③、⑫、⑬の文である。

まず⑫については「悟」の問題であるが、詳細についてはすでに前節で述べたように(表一参照)、『無量寿経論註』系、古写本系を支持している。

③では、問題となるのは、「觀察彼仏土莊嚴功德」「觀察阿弥陀仏莊嚴功德」「觀察彼諸菩薩莊嚴功德」である。ここでは「莊嚴功德」がポイントとなる。これを支持するのは『無量寿経論註』系である。しかし、古写本系や大蔵経系などは「功德莊嚴」となっていてその順が逆になっている。これを表にすると次のようになる。

(表④)

莊嚴功德	義寂『無量寿経述義記』、流布本、曇鸞『無量寿経論註』
功德莊嚴	浄影寺慧遠(西暦523～592年)『観無量寿経義疏』、金剛寺一切経、七寺一切経、宋版大蔵経、元版大蔵経、高麗再雕版、明版大蔵経、清版大蔵経

次に⑬であるが、問題となるのは、「以不為自身求諸楽故」である。これを支持しているのは、『無量寿経論註』系、古写本系、宋版大蔵

経などである。高麗再雕版系は「不以為自身求諸楽故」となっている。これも一覧表にしてみると次のようになる。

(表⑤)

以不為	義寂『無量寿経述義記』、流布本、曇鸞『無量寿経論註』、金剛寺一切経、七寺一切経、宋版大蔵経、元版大蔵経、明版大蔵経、清版大蔵経
不以為	高麗再雕版

以上のことから各テキストで字句の異同のある文を見てみると共通して義寂『無量寿経論述義記』を支持しているテキストは、曇鸞『無量寿経論註』である。したがって、義寂は、『無量寿経論註』系のテキストを参照して執筆活動したと言える。

五、法位の見た『無量寿経論』テキスト

法位の著した『無量寿経義疏』は不幸なことに現存しない。しかしながら、幸いなことに法位のそれは日本の浄土教諸師の論書、すなわち、源隆国『安養集』、了慧『無量寿経鈔』、良忠『観経疏伝通記』、高弁『催邪論』、長西『念仏本願義』、寂慧『浄土述聞鈔』、聖聡『大経直談要註記』などに引用されている。また、それらを収集して法位の『無量寿経義疏』の大部分が恵谷によって復元されている（恵谷〔1976〕）。それによると法位の『無量寿経論』の引用は、次のわずか2文である。

往生論云。二乗種不生（恵谷〔1976〕402頁17行目）（往生論は〔次のように〕云う。「〔極楽浄土には〕二乗の種は生まれない」）。

往生論云。明二乗種不生（恵谷〔1976〕403頁2行目）（往生論は〔次のように〕云う。「明らかに〔極楽浄土には〕二乗の種は生まれない」）。

これらの文では、各テキストの字句の異同がないため、残念ながら法位がどの『無量寿経論』テキストを参照したのか、明らかにすることはできない。

六、結論

以上、新羅諸師が彼らの論書に引用した、『無量寿経論』の文より検討を加えてきた。法位が見た『無量寿経論』は残念ながら手掛かりがなく、どの『無量寿経論』テキストを参照し

たのか不明である。しかしながら、元暁、憬興、義寂が実際に参照した、ひいては新羅に伝わった『無量寿経論』テキストは、『無量寿経論註』所引の『無量寿経論』であることが明らかになった。ということは彼らが見た『無量寿経論』テキストは『無量寿経論』ではなく、『無量寿経論註』そのものであったとの推測も成り立つがそれはありえない。何故ならば、新羅においては曇鸞『無量寿経論註』が伝わった形跡は全く見られないのであるからである。したがって、元暁、憬興、義寂が見たのは決して『無量寿経論註』テキストそのものでは決してなく『無量寿経論』、それも『無量寿経論』所引の『無量寿経論』テキストであったのである。

参考文献

- 愛宕邦康『『遊心安楽道』と日本仏教』、法蔵館、2006。
 安達俊英『『往生論』における訳語の問題、及び『大阿弥陀経』との関係』、『佛教大学総合研究所報』、第14号、1998。
 宇井伯寿・高崎直道『大乘起信論』、岩波文庫、1994。
 恵谷隆戒『浄土教の新研究』、山喜房仏書林、1976。
 大竹晋『新国訳大蔵経法華経論・無量寿経論他』、大蔵出版、2011。
 落合俊典「敦煌の仏典と奈良平安写経―分類学的考察―」、高田時雄編『漢字文化三千年』、臨川書店、2009、pp.239-254。
 梯信暁『インド・中国・朝鮮・日本浄土教思想史』、法蔵館、2012。
 韓普光（泰植）『新羅浄土思想の研究』、東方出版、1991。
 金知見 蔡印幻編『新羅仏教研究』、山喜房仏書林、1973。
 章耀玉『新羅の浄土教』『浄土仏教の思想』第六卷、講談社、1992。
 辻本俊郎『『無量寿経論』テキスト考』『無量寿経論校異』、佛教大学総合研究所、1999、pp.22-49。
 辻本俊郎『華嚴系論書に引用される『無量寿経論』について』、『仏教学会紀要』、第10号、2002、pp.11-31。
 辻本俊郎『『無量寿経論』諸本について』、『アジア文化学科年報』第9号、2006、pp.63-69。
 辻本俊郎『『遊心安楽道』の著者について ―『無量寿経論』を手がかりとして―』、『アジア文化学科年報』、

第1号、2007、pp.21-31.

辻本俊郎「元暁『阿弥陀経疏』における『無量寿経論』」、『アジア学科年報』、第3号、2009、pp.43-57。

辻本俊郎「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」、『東アジア研究』、第54号、2010、pp.79-88。

辻本俊郎『『無量寿経論』諸本対照』、私家版、2011①。

辻本俊郎『『無量寿経論』とBodhiruci』、『アジア学科年報』、第4号、2011②、pp.53-66。

辻本俊郎「憬興『無量寿経連義述文賛』に引用される『無量寿経論』」、『東アジア研究』、第59号、2013、

pp.57-65。

辻本俊郎『『無量寿経論』写本テキストをめぐって』、『東アジア研究』、第61号、2014、pp.53-62。

辻本俊郎「元暁と世親『無量寿経論』」、『東アジア研究』、第64号、2016、pp.79-87。

西村岡紹監修・梯信暁『宇治大納言源隆国編安養集本文と研究』、百華苑、1993。

福士慈稔『新羅元暁研究』、大東出版社、2004。

渡辺顕正『新羅・憬興師述文賛の研究』、永田文昌堂、1978。